

# 視覚支援学校の美術における 絵画鑑賞学習モデル構築に向けた実践研究

学籍番号：229504

氏名：浪岡栞里

主指導教員：正井隆晶

副指導教員：平賀健太郎

## 1. 研究概要

### 1.1 背景と目的

本研究の背景として、視覚障がい者の絵画鑑賞の課題がある。美術館側では、①視覚障がい者による二次元絵画作品鑑賞の課題がクローズアップされていること(広瀬, 2016)、②美術館においても触図作成など様々な取り組みが行われていること、③視覚支援学校と美術館の連携も進められていることが挙げられる。一方、視覚支援学校側では、①美術の教員が、授業における鑑賞題材の開発に難しさを感じていること(池田, 2021)、②オリジナルの触図作成の難しさがアンケート調査から言われていること(正井ら・松山ら・山本ら, 2022)が挙げられる。

これらの背景から、本研究では視覚支援学校での絵画鑑賞の授業を想定し、研究の大きな柱を「触図」「実物体験」「鑑賞の深化」の3つとした。「触図」では、美術館作成の触図の活用や絵画を触図へ翻案する方略の検討、「実物体験」では、言葉だけの認識で実物を知らないバーバリズムへの対応として描かれている事物の実物体験を取り入れること、「鑑賞の深化」では、鑑賞学習ルーブリック(新関・松岡, 2020)を用いて授業計画を立案・評価することに取り組み、研究を進めた。

## 2. 実践内容

### 2.1 方法

2023年6月下旬から7月上旬にかけて視覚支援学校中学部12名のうち生徒5名を対象に、京都国立近代美術館に所蔵されている福田平八郎の「竹」を使用し、1回2コマ続きの4回、計8時間の鑑賞学習を行った。生徒の視覚障がいの状態としては、盲生徒が2名、弱視生徒が3名であった。また、録音した音声を、鑑賞学習ルーブリック(新関・松岡, 2020)を基に評価も行った。絵画作品の選択理由としては、①絵画作品の複雑な重なりが少ないこと、②美術館作成の触図があること、③具体物を用意できることの3点からである。

## 2.2 取り組みの詳細

①自由な発想を育む、②知識を育む、③理由を考える、④構図と作品作り、の4回の展開で実践を行い、以下の表は、注目した点と使用した教材をまとめたものである。

授業内容	鑑賞学習ルーブリック(新関・松岡, 2020)の枠組み	触図と実物体験
絵画作品「竹」との出会い	形への注目	京都国立近代美術館 「さわるコレクション」
鑑賞を深めるために ー本物の竹に触れようー		実物体験
絵画作品の要素に迫る(1) ー色と位置についてー	色と位置・重なりへの注目	立体コピーによる触図
絵画作品の要素に迫る(2) ー自分なりに表現しようー	構図への注目	立体コピーによる触図

## 3. 成果と課題

成果は、「触図」「実物体験」「評価」の3つの視点で挙げられた。「触図」は、色の違いを触覚に置き換える際の翻案方法、実物の触感を想起できるような翻案方法の2つの工夫が必要であることが分かった。「実物体験」は、視覚障がい児童生徒の場合、言葉と概念を結びつける必要性はこれまでも指摘されてきたところだが(青柳・鳥山, 2020)、今回の実践を通して具体物を用いることの有効性を再確認できた。「評価」は、授業を計画する上で鑑賞学習ルーブリック(新関・松岡, 2020)の観点を活用したり、生徒の言葉をレベルと比較して評価することで鑑賞学習の現在地を確認したりできる、という面で有効であることが分かった。

成果が挙げられた一方で、課題も3つ挙げられた。1つ目は、全盲生徒と弱視生徒が共に共用できるように作品と触図の一致を目指すことである。使用文字や見えの状態によって触察に差があったり、触図の表現の制限から絵画作品に違いが生じたりしていたことから、何をどこまで触図で表現するのか、触図によって表現が難しい場合はそれを補うツールをどうするのかなどの工夫が必要と感じた。2つ目は、具体物の用意と抽象的な絵画作品の鑑賞についてである。鑑賞する作品によっては具体物を用意することが難しい可能性があり、抽象的な作品となればさらに難しくなる。様々な理由から作品の選択肢が狭まる中で、どのように絵画作品を選択し、具体物を用意・工夫するのが大切になると考える。3つ目は、評価から根拠を引き出す発問の工夫である。生徒の発言を評価する中で「どうしてそう思ったのか」といった発問をより多く投げかけることができれば良かったのではないかとという反省があった。生徒の発言を文字に起こし、参考となる鑑賞学習ルーブリック(新関・松岡, 2020)の評価観点を基に評価することで自身の発問の振り返りにもつながり、その後の授業改善につなげることが大切だと考える。これらの課題に取り組むことで、視覚障がいのある生徒の発言を引き出しながら鑑賞を深めていくことが期待できるのではないかと考える。